



お茶を飲みながら、ぎのわんの歴史をのぞいてみませんか？

ふるさとの偉人「察度」 「察度は「さつ」と？」

1372（洪武5）年1月、中国の王朝「明」は、琉球に朝貢をうながす使者を送ってきました。朝貢とは、皇帝に貢物を贈り、明の臣下に加わることです。朝貢には、公的な貿易ができるという、大きな利益がありました。察度（中山王）は、帕尼芝（山北王）と承察度（山南王）より先に、使者を送ります。

明の記録「明実録」によれば「中山王察度、弟泰期等を遣わして表を奉り方物を貢す」とあります。察度は、王弟の泰期たちを派遣して「表（皇帝あての書）」と貢物を差し上げたのです。これは、沖縄初の中国への朝貢となりました。

察度と泰期は、地元では英雄的人物であったようです。その証拠に彼らを讃える「おもろ」が伝わっています。「おもろ」とは、奄美・沖縄に伝わる古い歌謡です。

察度は「ぢやなもひ（謝名思い）」の名で、優れた容姿を持ち、人びとの欲しがる外国の宝物を手に入れた英雄として、泰期は「たちよもい（泰期思い）」の名で、特に「たうあきない（唐商い）」を流行させた優れ者で

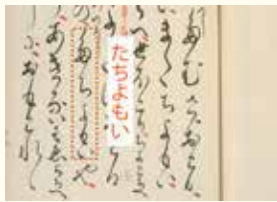
あると謡われています。察度の時代は、主にひらがなが使われていたもので、琉球では泰期を「たち」と表記していたと考えられます。歴史学者の東恩納寛惇によれば、古い時代の名前であるとのこと。事例は少ないですが、近世の家譜でも見ることが出来ます。

なお、「察度」は、郷土史家の末吉安恭（号：麦門冬）によれば「サツ」ではなく、これも古い時代の名前で、「サト」ないし「サト」であろうと指摘しています。

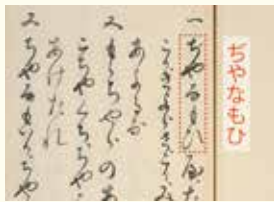
ちなみに、下の二文字が同じである承察度は、一昔前の琉球史の本では「ショウサツ」とされていました。しかし近年の研究では、「ウフサト」と読む説が有力です。ふたりは「サトーヤッチー（兄さん）」、「ヌーヤガ（何だ）」、「タチ」と言葉を交わしたかもしれません。

「問い合わせ」

市立博物館 ☎870-9317



▲泰期をたたえるおもろ（一部加筆）
「おもろさうし 仲吉本」
巻十五の六六
琉球大学附属図書館 所蔵



▲察度をたたえるおもろ（一部加筆）
「おもろさうし 仲吉本」
巻十四の一
琉球大学附属図書館 所蔵

察度の暮らしした謝名村



1321（至治元）年に奥間大親と天女の間に誕生したと伝わる察度が暮らした謝名村は、現在の真志喜・大山・大謝名が合わさった集落で1671（康熙10）年までは浦添間切に含まれていました。

市内には察度にまつわる場所があります。察度の見た景色を辿ってみましょう。

〈宜野湾市森の川〉（県指定名勝）

奥間大親が天女に出会った湧泉です。1725（雍正3）年、向氏伊江家により石造で整備されました。

〈真志喜森川原第一遺跡〉

宜野湾市森の川の近くで大親の屋敷があった場所と言われています。発掘調査で複数の建物跡・外国産陶磁器・鉄製品などが確認できました。

〈クガンナー〉

元々は黄金の転がる畑でしたが、察度の結婚後はここに楼閣を建てて暮らしたと伝えられています。

〈カンジャーガマ〉

察度が大和商人に黄金を売って鉄を買い、村人に配った農具を作った場所と言われています。発掘調査では約300〜400年前頃と思われる2基の炉と鉄滓・溶かした鉄から出るカスが出土しました。

（港田原）

当時は現在の大謝名メーヌカー通りまで入り江となっており、中国や大和の船が入り込んでいました。その後、比屋良川から運ばれた土砂が堆積して陸化し、近世（1600年頃）には水田地帯になったと考えられています。

市指定天然記念物である「大謝名メーヌカー淡水紅藻」は元来、淡水と海水が混じり合う河口等を生息域とすることから、昔は大謝名メーヌカー一帯まで海が迫っていた事を示しています。

港田原（現在の県営大謝名団地一帯）という地名から土地の歴史を知る事ができます。

〈ヤマトウガー〉

大和船が水を汲む場所であったそうです。

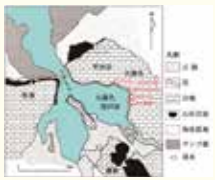
〈カニマンバカ〉

察度の義母弟、泰期の墓と言われています。泰期は1372年に中山王である察度の命を受けて、最初の進貢使として明に渡り交易を開始しました。

以上が察度にまつわる場所です。見学したいと思われた方は文化課が発行している地域の歴史文化遺産マップをご利用下さい。文化課のHPからダウンロードもできます。また、宜野湾市文化財ガイド「察度の会」では、例年、察度の日（3月10日）に合わせて、察度に関わる文化財巡りを開催しています。

【お問い合わせ】

文化課 ☎893-4430



▲『宜野湾市史 第9巻 資料編8 自然』より転載



▲歴史文化遺産マップ